

「ついにこの時が来たぜ！ 行くぞ！」

少年の叫びが周囲に響き渡った。

「どう考えても私の勝ちよ。強がりはやめなさい」

「フツ…：果たしてそうかな？ 今どういう状況にあるのか、じっくり聞かせてやろうじゃないか」

余裕を漂わせながら、少年は語り始めた。

どん底はすぐそこに見えていて、見上げればきりが無い。

よどんだ空気が漂うスラム街の裏通りで、赤髪の少年——ロックはため息をついた。視線を空に向けると、雲をつかまばかりの高い塔がそびえ立っている。一部の上流階級が住まう、富の象徴たる巨塔、通称「マウンテン」だ。

この世は支配者を除いて十三の階級に分けられ、下位の者は上位の命令に逆らえない。それは「差別」といった類のものではなく、誰もが自然に受け入れている「区別」のようなものだった。

老いも若きも関係ない。生まれた時に定められた地位が、人生の全てを決めるのだ。

「下らねえ仕事させやがって……」

日課のようにつぶやく愚痴を聞いてくれる人は誰もいない。いつもの事だ。

そのうち鐘が五つ鳴り、自分に割り当てられた作業「スラム街の清掃」は終了した。これもいつもの事だ。

「今に見てるよ…：例の計画で、世界をひっくりかえしてやる……」

更にまたいつもの様に呟いて「マウンテン」を見上げたロックだったが、急にむなしくなつて「…：帰るか」と独りごちた。

このまま家路につけば一日が終わる。しかしその日だけは、いつもと違う事が起きた。

「どいてー！！」

突然響く声に驚き、体が硬直するロック。そんな彼に何者かが「ドン！」とぶつかつて来た。

「どいてってゆつたのに！」

「なんだよ急に！ 危な——」

ロックはぶつかってきた相手を見て、思わず抗議の言葉を飲み込んだ。

「痛ててて……」

顔をしかめてお尻をさすっているその相手は五歳かそこらの女の子で、スラム街に似つかわしくないほど身なりが綺麗だった。

フリルのついたフォーマルなワンピースで、色合いはとてもシック。靴も見るからに高級品で、そのままパーティーに出られそうな雰囲気だ。

（俺より階級は上っぽいな……）

ロックは慎重に言葉を選んで問いかけた。

「あ、あの……お嬢ちゃん、どこから来たんだ？」

「ん？ あっち！」

（やっぱり！）

ロックは確信を深めた。少女が指差す方には「マウンテン」がそびえ立っていたのだ。

「マウンテン」に住んでいるという事は、階級的にはかなり上の筈である。

そんな高貴な人がスラム街に何しに来たのだろう。ロックが首を傾げていると、遠くの方から何やら騒がしい声が聞こえて来た。

「嬢はどっちへ行った？」

「この辺りで見失ったぞ！」

その声を聞いた少女は首をすくめ、声の主達から隠れるようにロックの後ろへと回り込んだ。顔は俯き、ふさぎ込んだ様子だ。高貴な雰囲気は消えうせ、まるで下層階級者の様な印象さえ受ける。

見かねたロックは少女に尋ねた。

「逃げて来たの？」

今にも泣きそうな顔でコクンと頷いた少女を見たロックは、諭すように言う。

「戻った方がいいよ。こんな所にいたって良い事なんか一つもない」

「やだもん」

「でも追いかけてるのは階級が上の人だろ？ 上位階級の人の言う事に逆らっちゃダメなんだよ。それがこの世界のルールなんだよ」

「知ってるもん」

「よし、じゃあ戻った方がいい——」

「やだもん！」

さっきよりも断固とした口調で少女が拒否した。もうすっかり上層階級者の風格を取り戻している。

ロックは苦笑いしながら、奥の手を使う事にした。

「お嬢ちゃん、これ欲しい？」

彼がポケットから取り出したのは大粒のキャンディーだった。下層階級者にはとても

貴重な嗜好品だが、この際仕方がない。

少女の様子を見ると明らかに興味をひかれたようで、唇を尖らせながらも横目でキャンディーをチラチラ見ている。

「……何味？」

「オレンジ」

「あたしが一番好きな味だよ」

少女はチラ見をやめて、まっすぐキャンディーに顔を向けている。

「そうでしょ。ほら、お嬢ちゃんにあげるよ」

「本当？」

目を輝かせて尋ねる少女を見て、ロックは微笑んだ。

「本当さ。でも約束してくれ。階級が上の人の命令には逆らわないって。誰もが守ってる大事なルールなんだよ」

「お兄ちゃんも守るの？」

「もちろんさ」

「わかった！　じゃあ約束する！」

よし、いっちょ上がりだ。子供を言い包めるなんてちよるいもんだ。

そう思っただけでキャンディーを差し出そうとしたロックに、少女が言う。

「そのキャンディーをちょうだい！　……これは『めーれい』ね」

「え……命令？」

急に出て来た、少女が使うのにふさわしくない単語に戸惑うロック。

「早くちょうだい！　階級が上の人の『めーれい』には逆らっちゃダメなんだよ」

「えっ……と……」

なおも口ごもるロックに少女は言い放った。

「あたしの方が階級が上だよ！　だからキャンディーをあたしに渡すのです！　これは

『めーれい』だよ！」

「は、はい」

子供にあっさり言い包められたロックは、素直にオレンジ味のキャンディーを少女に渡した。

小さな手でもぎ取るようにキャンディーを奪った少女は、包装紙を剥くのももどかしいといった様子で丸い砂糖菓子を口に放り込む。

「ほいひい」

満足そうに笑う顔は、無垢な可愛い少女そのものだ。しかしそんな無邪気そうな彼女にあっさり言い負かされてしまった。

プライドを傷つけられたロックは、これ以上この少女に関わるのはよそうと思いい、後

ずさりしながら言った。

「じゃあ俺はこれで……」

「はへ！」

そう言った少女は、親指と人差し指を自分の口に入れてキャンディーを掴みだした。

「ダメ！ あたしと一緒に逃げて！ 見つかったらダメなの！」

「でもほら、もう時間も遅いし——」

「めーれい」

「くっ……！」

ロックが言葉に詰まるのを見ると、少女はキャンディーを再び「バクン！」とワイルドに頬張って手を差し出した。

手を取るべきか逃げるべきか。ロックは悩んだ。もし手を取れば、絶対に変な事に巻き込まれそうだ。とは言え無視すると少女との約束を破る事になる。

「うゝむ……」

ロックが悩んでいる間にも、少女を探す声が徐々に近づいて来ていた。どこか粗野な声色をした男たち。そして目の前には自分を頼る少女。

「もう、どうなっても知らないからな！」

ロックはやけになって少女の手を取ると、細い道へと入った。裏道は蜘蛛の巣のように入り組んでいるが、普段からそこら中を掃除して回っているロックにとっては庭も同然だった。

ふと手をつないだ少女を見ると、キャンディーを頬張りながら懸命に走っていた。左右のほつぺたが順に膨らむ。口の中でキャンディーを器用に転がしているようだ。

（しようがねえな……）

ロックは少女を持ち上げ、お姫様抱っこで走り始めた。

「こつちのが早いだろ？」

照れ隠しでぶつきらぼうに言ったロックに、少女はニコリと笑いかける。彼は保護本能をこれでもかと言うぐらい刺激された。

（気がすむまで守ってやるか……）

キャンディー以上にうまく転がされている事にも気づかず、ロックは足に力を込めるのだった。

「……で、お前はその子を連れ帰って来たど？」

ぼさぼさ頭に丸いサングラスをかけた男が呆れたように言う。ぶかぶかで汚れたタンクトップをだらしなく来ていたが、体は筋肉質で見事に引き締まっていた。

「そうなんだよマナー、逃げてるうちになんか楽しくなっちゃってさ」

頭を掻きながら言うロックに、マネーは言い返す。

『楽しくなっちゃってさ』じゃねえよロック・ハート！ 世間じゃそれを誘拐っつうんだよ！」

「ワカラナイ」

「急にカタコトになってんじゃねー！ ったく、前々からお前はバカなんじゃないかと思ってたけど、今日確信したぞ」

「結構時間かかったな」

「うるせえ！」

イライラするマネーだったが、急に何かを思い出したように声を落とした。

「ところでよ、ようやく例のもんが完成したぜ」

「マジか！」

喜びの声をあげるロックの口を塞いでマネーは言った。

「声落とせ！ バレたら終わりなんだぞ。……ほら、見てみる」

「おお！」

マネーが拵げた紙を見て感嘆の声をあげるロック。

そこには巨大な迷路のような図面があった。

「おい、これが『マウンテン』の……」

「一階部分の見取り図だ。建築担当の下層階級者が長年かけて作り上げた一点物だ。目的の装置は地下一階にあるみたいだ。まさかあんなバカ高い塔に地下があるとは思わねえ。うまい隠し場所だ」

「すげえ……」

所々不明瞭な部分はあったが、目的を達成するには十分な詳細さだった。

ロックは感極まった様子でつぶやく。

「この地下の装置を俺達が協力して壊せば、この世界のルールをひっくりかえせるって訳だな」

「ああ、くっだらねえルールをな」

マネーも上ずった声で答えた。

「……ふん。で、何それ」

「え、何って『マウンテン』の見取り……嬢ちゃん！」

思わず叫ぶロック。いつの間にか横に来ていた少女が、身を乗り出しながら見取り図を上げしげと見つめていたのだ。

「お前、寝てたはずじゃ！」

「大きな声出してたから起きちゃったよ」

小さな手で目をこすりながら少女は言った。そんな様子を見てマネーは精一杯の笑顔

を作り、諭すように語りかける。

「お嬢ちゃん、お兄ちゃん達はとても大事な話をしてるんだ。うるさくしたのは悪かったから、もう少し寝ておいてくれるかな？」

「やだ。もう目がさめちゃったし、なんだか面白そうだもん。あたしも混ぜて」

「遊びじゃないんだよお嬢ちゃん。良い子だから寝てなさい」

「やだ。私も遊ぶ！ だけどその絵、間違ってるよ。もう無い道がかいてあるもん」

「だから我がままを……え？ お嬢ちゃんこの場所知ってるのかい？」

「うん。そこから来たもん。だけど間違ってる」

その言葉に顔を見合わせたロックとマネーは、勢い込んで少女に尋ねた。

「どどど、どこが違ってる？」

「こことここ。あとここも！」

少女が迷うことなく次々に指をさしていく。

「あとこのドアは地下に行かないよ。行き止まりの部屋に行くだけ。地下はこっち」

それを熱心に聞いていたマネーが、ロックに耳打ちする。

「おい、こりゃチャンスだぞ。この日の為に入念な準備してたんだ。明日にでも決行しよう！」

「ケンとクラブはどうなんだ？ 全員が揃わないと装置は壊せないぞ」

「すぐ近くに潜伏させてるぜ。実は地図が手に入った時点で招集をかけてたんだ」

「分かった。ところで相談なんだが……ついでにあの子を『マウンテン』に送り届けてもいいか？ 一人でこんな所に置いていけねーし、いざと言う時役立つかもだし」

ロックの提案に最初は首をひねっていたマネーだったが、最後の言葉に心惹かれたようだ。

「分かった。じゃあ明日の朝早くに出発だ。ケンとクラブにも伝えておく」

明けて早朝、四人の男と一人の少女が裏通りを小走りで駆けていた。と言っても、少女はロックに抱えられているのだが。

少女には「スパイごっこをしよう」と嘘をついて連れ出した。多少ぐずる事も想定してオレンジ味のキャンディーも準備していたのだが、遊びと見るや「それってわたしも一緒にできるの？」と目を輝かせてついて来たのだ。

その素直な様子を見て、ロックはご褒美をあげたのでキャンディーは無駄にならなかった。

「キャンディー好きなのか？」

道中で、いつも寡黙なクラブが珍しく口を開いた。声を聞いたのは久しぶりだ。

「好き！」

少女は無邪気に答える。

体がゴツイクラブは周囲から乱暴者だと誤解されがちだ。彫りの深い顔に加え、棍棒のような両腕、更には綺麗にそり上げられた頭が彼の威圧感を増幅させている。

しかし少女はそんなクラブに怖がる様子もなく笑顔で喋っている。

「おじちゃんは何味が好き？」

「ソーダ。あと〃おじちゃん〃じゃない。みんなと一緒にまだ十代だ……」

二人の会話に微笑ましさを感じるロックだったが、気になる事もあった。仲間の一人であるケンの表情がさえないのだ。嬉しそうにキャンディーを頬張る少女の姿を見てみんなが笑っている時でさえ、一人難しい表情をしていた。

「ケン、どうかしたのか？」

ロックの問いかけに、ケンはビクンと反応して「何でもない」と答える。

いつも抜け目なくシャープな印象を受けるケンなのだが、やけに落ち着きがない。長く伸ばした黒髪を、神経質にかき上げている。切れ長でいつも女性を虜にする涼やかな目は、どこか落ちくぼんだ様子だ。

「何かあったら言ってくれよ」

「ああ……」

いつもはつきりと返事するケンらしからぬ物言いだ。

不安になったロックは、他の仲間達を見遣った。

頼れるリーダーであるマネーは先頭を力強く走っているし、寡黙なクラブもいつものように黙って歩を進めていた。

（大丈夫だよ……）

何しろ奇跡的に出会えた四人だ。きっと目的を達せるに違いない。自分が半端な気持ちでいたら、他の三人に悪い。

ロックは自らを奮い立たせて裏道を進んで行った。

「みんな寝るところないの？」

抱きかかえていた少女が不意に質問をしてきた。

ロックにとっては見慣れた光景だったが、裏道にはいろいろなものがあつた。散乱するゴミや、唸り声をあげる野良犬。そしてそこら中でゴロ寝をする下層階級の者。中には「ようロック、何か恵んでくれよ」と物乞いする者までいる。「今日は駄目だ」とマネーが断つても、足に縫り付いて「頼むよ、腹減ってるんだ」と懇願する。そんな人間は、〃マウンテン〃にはいないだろう。

少女の質問に、ロックは慎重に答えた。

「そうだな。ここが彼らの寝場所なんだ」

「辛くないの？」

「当たり前になってるからな。でも、俺は思うんだよ。みんなが柔らかい布団で寝られたいなって」

「そしたらみんな一緒に遊べる？」

「ああ、遊べるさ」

「すごい。楽しそう」

「だろ？ その為に俺達は、偉い人の所をお願いをしに行くんだ」

「あたしも手伝う」

真剣な表情でそう言う少女を見てロックは微笑み、ポケットに忍ばせていたオレンジ味のキャンディーをもう一つ手渡した。

「先払いの報酬だ」

ロックの言葉に少女はにっこりと笑い「ありがとう」とお礼を言った。

そんな二人の様子を、ケンはおびえた表情でチラチラと盗み見ているのだった。

さしたるトラブルもなく、一行は目的の扉の前に辿り着いていた。

途中で見張りの衛兵を数人眠らせたが、騒ぎになっている様子はない。

「入るぞ。お嬢ちゃんはここで待ってな」

さすがに緊張した声色でマネーが言い、地下へと続く扉を開く。鍵はかかかっていない。そもそもここまで侵入者が来ることを想定していないのだろう。

少女をその場に置いて、男四人は階段を下って行く。

程なく階段が終わり、目的の装置が見えて来た。塔の中枢を、いや、この国のルールを司る巨大装置だ。

「ついに来たな……」

感慨深そうにマネーが言う。

「この装置は、同じ階級に属する四人が同時に攻撃すると破壊できる。そしたらすべての価値がひっくり返る」

ロックもそう言い、三人に目くばせをした。ついに待ちわびた瞬間が来た。

しかしその時、ケンが不思議な動きを見せた。急に装置から離れ、部屋の奥へと進んでいったのだ。

「どうしたんだケン！」

ロックが尋ねると、ケンはみんなの方を振り向き、悲しそうな表情で叫んだ。

「みんな、すまない！」

その声を合図に、部屋の電気が一斉にともった。

「そこまでだお前達！」

声の主は塔の衛兵だった。

何人もが部屋をぐるりと取り囲み、それぞれが武器を構えている。

「お前らのやろうとしている事はすべてお見通しだ！」

衛兵の隊長らしき口ひげをはやした人物が鋭い声で言う。

他の兵士もロック達に厳しい視線を放っている。

「ケン……お前、スパイだったのか」

マネーが脱力したように言うのと、部屋の奥でガタガタ震えていたケンが泣き叫ぶ。いつものクールな彼の姿はない。

「すまないみんな！ 仕方なかったんだ！ 反逆者の情報を与えたら塔に住まわせてくれるって……俺には体の悪い家族がいるんだ！ こうするしかなかったんだ！ 本当にすまない！」

「お前……俺達がこの日の為にどれだけ……！」

マネーが肩を震わせながら声を絞り出した。そんなマネーの肩に手を置き、ロックが言う。

「仕方ないさ。俺だって同じ状況だったらそうする。間違ってるのはこの世界だ。ケンじゃない」

そんな事はマネーも重々承知だった。だからこそ、そんな世界を変えたかった。そしてあと一歩でそれが叶うところまで来ていたのだ。

しかしすべては無駄になった。装置は四人が揃わないと破壊できないのだ。

「くそっ！」

マネーが悔しそうに拳を床に打ち付ける。その時、ケンの背後にある扉がゆっくりと開いた。

「下層階級の癖に立派な事言うじゃない」

そう言って出てきた人物を見て、ロックは思わず声をあげた。

「じよ……嬢ちゃん」

そう、奥から出て来たのは、昨日保護してロックがここまで連れてきた少女だったのだ。

「よくやったわケン。いい働きよ」

傍らにへたり込むケンに少女が語りかける。

（なるほど。俺達の動向を探る為、そしてケンを監視してけん制する為に、あえて行動を共にしてたのか……）

ロックはようやくよく納得した。そう言えばケンは、少女を見てからずっと緊張の面持ちだった。

「俺達をだましたのか嬢ちゃん」

ロックの問いかけに、少女は不機嫌そうに言う。

「あなたに嬢ちゃんと言われる筋合いはないわ。私は階級を超越した特別な存在なのよ。敬いなさい」

そこにロックの知る少女はいなかった。自分に対して、あんな冷酷な顔をするとは信じがたい。着ている服も、いつの間にか派手な色合いになっていた。

「とにかくケン、あなたに報酬を渡すわ。一歩下がちなさい」

気まずいのだろう。ロック達の方は一切見ず、ケンが言われた通り一歩下がった。と、次の瞬間、ケンの姿がその場から消える。

「うわあああああ！」

聞こえて来たのは徐々に遠くなるケンの声だった。

「ケン！」

思わず駆け寄りそうになったロックを、衛兵の武器が遮った。

「何をした！」

ロックが叫ぶと、少女は笑って言う。

「この塔の住処に案内したのよ。ゴミが集まる地下墓地にね。念願かなって喜んでるんじゃないかしら。生きていればの話だけど」

「お前……！」

ギリギリと奥歯をかむロックに対し、少女が冷やかに言う。

「誘導する部屋を間違えた罰よ」

「……何？」

ロックは少女の言葉に違和感を覚えた。地図の間違いを指摘し、この部屋に誘導したのは彼女なのだ。それをなぜケンのせいだと言うのか。どうも話が見えない。

そんなロックの疑問をよそに、少女は言葉が続ける。

「とにかくあなた達の計画はおしまい。同じ階級の人間四人が揃わないと、その装置は破壊できないわ」

「お嬢ちゃん……」

ロックは違和感の正体を掴みかけていた。いや、彼の中でその考えは、ほぼ確信に近いものになっていた。

「好きなキャンディーの味は何だ？」

ロックの質問に少女が眉をひそめたその時、彼らの背後から元気な声が聞こえて来た。

「オレンジ！」

声の主は、ロックが二日を共にしたあの少女だった。

「だよな嬢ちゃん！」

「うん、お兄ちゃん！」

少女はロックに笑いかけ、自分と瓜二つの少女に言葉をぶつける。

「お姉ちゃん！ 私この人達の味方するからね！ みんなで遊べる世界を作るの！」
お姉ちゃんと呼ばれた少女はみるみる狼狽え始めた。

「やめなさい！ そんなことしたらどうなるか分かってるのは それに、あなたはその下民と同じ階級じゃないでしょ！」

「お姉ちゃんさっき言ったよね。私は階級を超越した存在だって。そう、私達はどんな階級にもなれる特別な存在なのよ」

「やめなさい！」

焦りの色を隠せない少女が、ロック達の元へ駆け寄ろうとする。しかし、もう一人の少女の指示の方が早かった。

「お兄ちゃん達、準備して！ 私が四人目になる！」

「マ……マジでそんな事できんのか？」

「質問はあと！ はやくして！」

少女の指示で配置についたロックは、少女の方を見て感極まったように言う。

「嬢ちゃん、何てお礼を言ったら……」

それに対して少女は笑顔で答えた。

「だいじようぶ！ もう『さきばらい』で貰ってるから！」

彼女の手には、オレンジのキャンディーが握られていた。

「へへっ！ そうだったな！ 準備はいいか？」

ニヤリと笑ったロックの問いかけに、マネーとクラブも「おう！」と答える。

「ついにこの時が来たぜ！ 行くぞ！」

ロックの叫びが、巨塔の地下に響き渡った。

「という事があって……で、『6』を三枚とジョーカー一枚で『革命』！」

「って長いわ！ カード一組出すのに、どれだけ長い話聞かせるのよ！」

西日差す放課後の教室。高校生の男女二人が、人がまばらになった教室でトランプに興じていた。

少年の長話につき合わされた少女は、少し怒った様子だ。

「そもそも何なのよ、『同じ階級に属する四人が同時に攻撃すると価値がひっくり返る』って。大富豪の『革命』をそんな大げさに言う奴、初めて見たわ」

「間違っちゃいないだろ。数字ですべてが決まる世界だけど、『革命』で価値がひっくり返るんだ」

少年はどこまでも得意気だ。そんな男を見て、少女はため息をつく。

「数字が六だからロックってのも単純すぎ。世界観にも合っていない気がする」

「本当はJ（ジャック）が理想だったんだけどな。『革命』できるのが『6』だけだったんだから仕方ないさ」

「あれ？ でも男達は四人全員ロックじゃないとおかしくない？」

「全員ロックだぜ。主人公はロック・ハート、あとがロック・マネー、ロック・ケン、ロック・クラブ」

「はあ……ケンは剣でスピード、マネーは貨幣でダイヤって事ね。じゃあ聞くけど、何でジョーカーが少女なのよ。ババだからお婆さんでいいじゃない！」

「それだと盛り上がり欠けるだろ？ だからジョーカーのジョーを取ってお嬢ちゃん……って事にした」

「まあいいわ。じゃ、私の番ね。はい、『革命』返し」

少女が『J（ジャック）』『三枚と色付きのジョーカーを場に出す。』

「えええええ！ マジで！ ロック達の苦労はどうなるんだよおおお！」

「ふふ、無駄な努力だったわね。お姉ちゃんの方は私が持ってたの。あんたパスよね。はいK（キング）のツーカードであがり。私の勝ちね。ほら、約束通り飲み物買ってきなさい」

言われた少年は渋々応じる。

「ちえ……しょうがないな。帰って来たらもう一勝負だからな！」

そう言っただけで教室を出ようとする少年を、少女が呼び止める。

「待ちなさい！ まだ飲み物の種類決めてないでしょ！」

「……へ？ お前いつもオレンジジュースだろ？」

当然だろといった風に言う少年に、少女は少し顔を伏せた。頬が真っ赤なのは西日のせいなのか。

「まあ、そうだけでも……」

「じゃあちよつと待っててくれよな、お嬢ちゃん」

「誰がお嬢ちゃんよ！」

少女の照れたような怒ったような声を背に、少年は廊下を駆けていくのだった。

完

志田用太郎

第十六回エンターブレインえんため大賞小説部門優秀賞を受賞。二〇一四年に『ハイスクール・ローレライ 運命のひと耳惚れ』（ファミ通文庫）を刊行する。